

Music Of The Night

ミュージック・オブ・ザ・ナイト

John Di Martino's **Romantic Jazz Trio**
ロマンティック・ジャズ・トリオ

- オール・ザット・ジャズ**~「シカゴ」より**All That Jazz** ~ From Chicago 《 J. Kander 》(4：56)
- アイ・ドリームド・ア・ドリーム** ~「レ・ミゼラブル」より**I Dreamed A Dream** ~ From Les Miserables 《 H. Kretzmer / C. M. Schönberg 》(6：21)
- ミュージック・オブ・ザ・ナイト**~「オペラ座の怪人」より**Music Of The Night** ~ From The Phantom Of The Opera 《 A. L. Webber 》(5：11)
- メモリー** ~「キャッツ」より**Memory** ~ From Cats 《 A. L. Webber 》(5：00)
- ホエン・ユア・グッド・トゥ・ママ**~「シカゴ」より**When You're Good To Mama** ~ From Chicago 《 J. Kander 》(5：49)
- オール・アイ・アスク・オブ・ユー**~「オペラ座の怪人」より**All I Ask Of You** ~ From The Phantom Of The Opera 《 A. L. Webber 》(4：44)
- メイン・ハー**~「キャバレー」より**Mein Herr** ~ From Cabaret 《 J. Kander 》(4：43)
- メイビ・ジス・タイム**~「キャバレー」より**Maybe This Time** ~ From Cabaret 《 J. Kander 》(5：33)
- オン・マイ・オウン**~「レ・ミゼラブル」より**On My Own** ~ From Les Miserables 《 H. Kretzmer / C. M. Schönberg 》(4：27)
- ビューティ・アンド・ザ・ビースト**~「美女と野獣」より**Beauty And The Beast** ~ From Beauty And The Beast 《 H. Ashman / A. Menken 》(5：46)
- トゥモロー・ピロングス・トゥ・ミー**~「キャバレー」より**Tomorrow Belongs To Me** ~ From Cabaret 《 J. Kander 》(2：53)
- センド・イン・ザ・クラウン**~「リトル・ナイト・ミュージック」より**Send In The Clowns** ~ From Little Night Music 《 S. Sondheim 》(4：00)
- イフ・ユー・クッド・シー・ハー** ~「キャバレー」より**If You Could See Her (The Gorilla Song)** ~ From Cabaret 《 J. Kander 》(3：17)

ジョン・ディ・マルティーノ John Di Martino (piano)

ボリス・コズロフ Boris Kozlov (bass)

ティム・ホーナー Tim Horner (drums)

録音：2005年9月25、26日　ザ・スタジオ、ニューヨーク

©© 2006 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

*

Produced by Tetsuo Hara & Todd Barkan
Recorded at The Studio in New York on September 25 & 26 , 2005.
Engineered by Katherine Miller Mixed and Mastered by Venus 24bit hyper Magnum Sound：Shuji Kitamura and Tetsuo Hara
Front Cover：© Irina Ionesco / G. I. P.Tokyo
Designed by Taz

ジョン・ディ・マルティーノの1990年代のアルバム「オールド・ファッションド・ジャズ」のジャケット

ズ・スタンダードになりそうな気がする。

- ミュージック・オブ・ザ・ナイト~「オペラ座の怪人」より世界的なヒットを記録したアンドリュー・ロイド・ウェーバー版のミュージカル『オペラ座の怪人』(1986年)から生まれた名曲。ファントム(怪人)が歌うバラードだ。ロイド・ウェーバーが作曲、チャールズ・ハートとリチャード・スティルゴーが作詞を共作した。原作はガストン・ルルーの小説で、映画、ミュージカルとも数多くのバージョンが誕生している。2004年にはロイド・ウェーバーが製作した映画がヒットした。

- メモリー~「キャッツ」よりアンドリュー・ロイド・ウェーバーが、T.S.エリオットの詩集「ボッサムおじさんの猫とつき合う法」を元にしてミュージカル化した『キャッツ』(1981年)の主題歌。娼婦ネコのグリザベラが歌う。作曲はロイド・ウェーバー、作詞はトレバナー・ナン。ミュージカルは記録的なロングランを更新した。ロマンティック・ジャズ・トリオの演奏は、メロディーとリズムの関係を幅を持たせて、フレッシュなアプローチをみせる。

- ホエン・ユアアー・グッド・トゥ・ママ~「シカゴ」よりミュージカル『シカゴ』のナンバーで、これもフレッド・エブが作詞、ジョン・カンダーが作曲した。ジョン・ディ・マルティーノのメロディアスでファンキーなピアノ演奏を聴くことができる。

- オール・アイ・アスク・オブ・ユー~「オペラ座の怪人」よりアンドリュー・ロイド・ウェーバー版のミュージカル『オペラ座の怪人』中のナンバーで、ロイド・ウェーバーの作曲、チャールズ・ハートとリチャード・スティルゴーによる作詞。ロマンティック・ジャズ・トリオはワルツ調に編曲して演奏している。

- メイン・ハー~「キャバレー」よりライザ・ミネリ主演、ボブ・フォッシー監督のミュージカル映画『キャバレー』(1972年)のナンバーで、フレッド・エブが作詞、ジョン・カンダーが作曲した。1966年のブロードウェイ・ミュージカルの映画化だが、この曲は映画版で登場した。ブロードウェイでは2度りバイバル公演が行なわれている。「Mein Herr」はドイツ語で、目上の男性に対する呼びかけで、「旦那様、愛するあなた」などの意味。

- メイビー・ジス・タイム~「キャバレー」よりこの曲もミュージカル映画『キャバレー』のナンバーで、映画版で登場した曲だ。作詞はフレッド・エブ、作曲はジョン・カンダー。フランク・シナトラ、トニー・ベネットなども歌ったスロー・バラードだ。ジョン・ディ・マルティーノの繊細なタッチが美しい。

- オン・マイ・オウン~「レ・ミゼラブル」よりミュージカル『レ・ミゼラブル』から生まれた人気ナンバー。多くのカバー録音が残されている。クロード・ミッシェル・シェーンベルクが作曲、ハーバード・クレツマーが作詞した。ロマンティック・ジャズ・トリオはこの曲でも原曲をスインギーなジャズ・ナンバーに替えている。

- ビューティ・アンド・ザ・ビースト” ~「美女と野獣」よりディズニー・アニメ映画『美女と野獣』(1991年)の主題歌。作曲はアラン・メンケン、作詞はハーワード・アシュマン。この曲はセリーヌ・ディオンとピーボ・ブライソンがデュエットして大ヒット、アカデミー賞とグラミー賞をダブル受賞した。1994年　にブロードウェイ・ミュージカル化、ディズニー初のミュージカルとして話題を呼んだ。

- トゥモロー・ピロングス・トゥ・ミー~「キャバレー」よりミュージカル『キャバレー』(1966年)のナンバーで、フレッド・エブが作詞、ジョン・カンダーが作曲した。

- センド・イン・ザ・クラウン~「リトル・ナイト・ミュージック」よりこの曲はすでにジャズのスタンダード・ソングになっており、特にサラ・ボーンが得意レパートリーにしたことで知られる。ミュージカル『リトル・ナイト・ミュージック』(1973年)から生まれた名曲で、ステイーブン・ソンドハイムが作詞作曲した。『リトル・ナイト・ミュージック』は「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」の英訳で、ソンドハイムのモーツァルトへの傾倒ぶりが示されている。

- イフ・ユー・クッド・シー・ハー(ザ・ゴリラ・ソング)~「キャバレー」ラストもミュージカル『キャバレー』(1966年)のナンバーで、フレッド・エブが作詞、ジョン・カンダーが作曲した。映画ではジョエル・グレイがゴリラと一緒にこの曲を歌う。

(高井信成)

ニューヨークを拠点に活躍中のピアニスト、作編曲家ジョン・ディ・マルティーノが率いるロマンティック・ジャズ・トリオのサード・アルバムだ。これまでの2枚『甘き調べ』(2004年)、『ソー・イン・ラブ』(2005年)はスタンダード・ソング集で、前者はマルティーノの得意とするラテン系のナンバーも含まれていた。今回の『ミュージック・オブ・ザ・ナイト』は明確なテーマを持っており、ブロードウェイ・ミュージカルの名曲集である。ミュージカル集のジャズ・アルバムは珍しくない。だが、ロマンティック・ジャズ・トリオのこのアルバムは、1960年代から以降のブロードウェイ・ミュージカルの名曲にスポットが当てられているので要注目だ。

ジャズのスタンダード・ナンバーの大半は、ミュージカルと映画から生まれている。そして、ミュージカルも映画も1950年代までの作品がほとんどだ。これはなぜかといえば、1960年代にロックの人氣、公民権運動、ベトナム戦争などにより、時代が大きく変化してしまい、ジャズやミュージカルも変化せざるをえなくなったことに関係がある。ジャズは多様化の時代をむかえ、フリー・ジャズ、ソウル・ジャズ、フュージョンなどのムーブメントが起こる。ブロードウェイ・ミュージカルも同じで、伝統的なスタイルは時代遅れなものになり変革を迫られる。その新しい傾向の始まりとなったのは、レナード・バーンスタインが音楽を担当した『ウェスト・サイド・ストーリー』(1957年)で、それ以降『キャバレー』(1966年)ではナチズムを風刺、『ヘアー』(1967年)ではロックを導入して麻薬や反戦を反映させたミュージカルなどが画期的な成果を収めた。70年代には、『コーラスライン』(1975年)が斬新なスタイルで成功し、同年のボブ・フォッシーの『シカゴ』は舞台は1920年代ながら時代を反映させてブラック・ユーモアを盛り込んだ。さらに、80年代に入ると、英国経由でアンドリュー・ロイド・ウェーバーの『キャッツ』(1981年)や『オペラ座の怪人』(1986年)などが、ニューヨークのブロードウェイ・ミュージカルのみならず世界を席巻する。ミュージカルは国際化し、世界規模の産業になった。また、90年代にはディズニーが『美女と野獣』(1994年)のミュージカル化を皮切りに、アニメ映画のミュージカル化という手法でブロードウェイに進出、退廃した42丁目通りを復活させた。1950年代までのブロードウェイ・ミュージカルはアメリカのショー・ビジネスのメッカであり、ジャズを含めたポピュラー音楽のヒット曲の発信地でもあったが、新しい時代の到来により黄金時代は終止符を打ち、困難な時期を何度か迎えながらも、時代の変化を受入ながらこうしてブロードウェイ・ミュージカルは盛況を続けてきたのである。

では、なぜ1960年代以降は、ミュージカルからジャズのスタンダード・ナンバーが生まれにくくなったのだろうか。その理由としては音楽の形式がバラエティに富むためにジャズに編曲しにくいこと、総体的にみればミュージカル発のヒット曲の数がそれまでと比べて減ったことなどが考えられる。また、新しい変化を受け入れにくいジャズ・ミュージシャンの保守的な体質も要因になったと思われる。だが、じっさいは、このロマンティック・ジャズ・トリオのアレンジと演奏を聴けばわかるように、アレンジはミュージシャンの創意と工夫でクリアできるものなのだ。ロマンティック・ジャズ・トリオのニュー・アルバムは、ブロードウェイ・ミュージカルの新しい名曲にスポットを当てた点が話題であり、このようなアプローチが今後ジャズ・シーンで増えれば、ジャズはもっと面白くなってくると思う。

ロマンティック・ジャズ・トリオのメンバーは、ピアノのジョン・ディ・マルティーノ、ベースのボリス・コズロフ、ドラムのティム・ホーナー。コズロフとホーナーは、マルティーノのよき共演仲間だ。このトリオはジョン・ディ・マルティーノが主役であり、ちなみに、1作目のベースはウゴンナ・オケイゴ、2作目のベースはアイラ・コールマン、ドラムは1～2作目ともグラディ・テイトだった。ベースとドラムが交替してもロマンティック・ジャズ・トリオのスタイルに変わりはない。彼らの演奏は、グルーブ名どおりロマンティックなジャズもさることながら、正統派のジャズ・ピアノ・トリオの魅力にあふれる。ジョン・ディ・マルティーノのピアノは、いろんな意味でバランスがいいと思う。クラフトマン的なテクニックを持ち、それをひけらかすことはない。ジャズ特有のスイング感やファンキーなフィーリングをあわせ持ち、過剰にファンキーに流れることもない。ジャズ・ピアノの芸術性とエンタテインメント性のバランスがととてもよく、そのサジ加減がうまくて惹き付ける。イタリヤ系のアメリカ人ということだが、実にアメリカ人らしいピアノを聴かせる名手である。

ジョン・ディ・マルティーノはフィラデルフィア出身。レニー・トリスター